

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 26 年 6 月 16 日現在

機関番号：32689

研究種目：基盤研究(C)

研究期間：2011～2013

課題番号：23520934

研究課題名(和文) 古代マヤ社会の形成・発展に関する基礎的研究

研究課題名(英文) Fundamental Study of the Ancient Mayan Social Formation and Development

研究代表者

寺崎 秀一郎 (Terasaki, Shuichiro)

早稲田大学・文学学院・教授

研究者番号：90287946

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 4,000,000円、(間接経費) 1,200,000円

研究成果の概要(和文)：ホンジュラス共和国西部、コパン県所在のエル・プエンテ遺跡において発掘調査を実施した。エル・プエンテ遺跡は古典期において南東マヤ地域最大の都市遺跡コパンの影響下にあった2次センターである。同遺跡の支配者の居住用建造物の調査成果とコパン遺跡の研究成果を比較した結果、ローカルエリートとコパン政体エリートの居住施設には建築技術上の差異は認められないことから、儀礼空間でもある「広場」構成の相同性を通じて、中心と周縁は結合していると考えられる。一方、政治的階層差は、「広場」構成要素における石彫や碑文の密度、質的差異に基づく。

研究成果の概要(英文)：I realized the excavation at the archaeological site El Puente which locates in the western Republic of Honduras. El Puente is the secondary center that was at the Classic Period under the influence of the greatest center Copan in the southeastern Maya area. Since the results of comparative studies between the residential mound for the ruler of El Puente and Copan elite, the difference in architectural skills could not be confirmed. It is supposed that the elite of Copan Polity and the local elites of El Puente had combined by the homology of their component at the Plaza which was functioned as ritual space too. Otherwise, there is a clearly political hierarchy between the center and periphery. It is because that based on the density and qualitative difference of their sculptures and inscriptions in the component of Plazas.

研究分野：人文学

科研費の分科・細目：史学・考古学

キーワード：古代文明学 マヤ ホンジュラス 中心と周縁 階層性 政治組織

1. 研究開始当初の背景

マヤ考古学研究は欧米の研究者（機関）を中心にすでに100年以上におよぶ調査研究の歴史をもち、1980年代以降、加速した碑文解読学の成果や微量分析、DNA分析などの導入により、新たな局面を迎え、特に古典期（AD 250～900年頃）社会の政治的経済的組織、あるいは、王権論などの研究が盛んにおこなわれている。

その中で豊富な出土遺物や碑文資料に基づいた王朝史の解明は、個々の都市の歴史を明らかにしただけではなく、都市間の関係を読み説くことを可能にした。個別具体的なデータの蓄積と分析は、古代マヤ社会の一端を明らかにしたものの、古代マヤ社会を統御する王権がいかにして発生し、発展を遂げたのかという点については、未だ十分な検討がなされたとはいえない。この点について、たとえば、アーサー・デマレストはスタンレー・タンバイアの銀河系的政体論を援用し、イデオロギー的側面から古典期マヤ王権の源泉について説明を試みた。あるいは、「劇場国家」モデルにヒントを得た猪俣健の研究なども知られている。これら先行研究に見られる王（権）＝イデオロギー的統御装置という視点は王を戴く主要センターと下位センターの有機的結合を理解する上で一つの手がかりとなり得るだろう。しかし、王（権）＝イデオロギー的統御装置という視点では、観念論的に古代マヤ王権をとらえることはできても、その実像を理解するには不十分である。古代マヤの王権とは王個人、あるいは、その正当な継承権保持者だけの問題ではなく、王が王であることを受容する社会的システムとして機能していたことを明らかにしなければならない。そのためには、古代マヤ社会を統合する基本原理を考古学的に実証する必要がある。そこで、本研究においては、「広場」に注目することにしたい。

「広場」とは、マヤ考古学においては、plaza、court、patio等呼び習わされているが、それぞれの名称について明確な基準はなく、四辺を何らかの構造物によって囲まれたために生じる空間と定義できよう。この「広場」については、従来、セトルメント・パターン研究からの視点、あるいは、儀礼空間としての視点から論じられてきた。たとえば、大センターの「広場」が王のパフォーマンス空間として利用されたという仮説は、「広場」に付与された機能を読み解く上で、重要な示唆を含んでいるだろう。しかし、「広場」は大センターのみならず、二次、三次センターといった下位センターにおいてもその存在が確認されており、都市という景観や機能を構成する重要な要素の一つである。

2. 研究の目的

報告者は、1992年以来、ホンジュラス西部、コパン県、ラ・エントラダ地域を中心に調査を継続してきたが、過去の採択研究課

題（課題番号：15720185）において実施した発掘調査から、南東マヤ地域最大のセンターであるコパン政体下の二次センターであるエル・アブラ遺跡の「広場」（プラサK）中心部において、「広場」の建築儀礼に伴うと考えられる二次埋葬を検出した。これは、大センターの「広場」とは異なる位相における儀礼空間としての「広場」とその形成過程に関する研究の必要性を示唆している。つまり、遺跡の政治的階層にかかわらず、なぜ「広場」が求心力をもつのか、その理由を明らかにしなければならない。たとえば、コパン遺跡では、初期コパンアクロポリスプログラム（ECAP）によってコパン王朝初期のアクロポリス内における建造物配置を明らかにし、王朝創始期以来、アクロポリスが重要な役割を担っていたことを示したが、なぜアクロポリスが形成されたのかという点については不問に付している。ここで、重要なことは、アクロポリスばかりでなく様々な政治的階層にある遺跡内の「広場」はアプリアリに存在したのではなく、時間経過にともない、結果として四辺を建造物で囲まれた空間として創出される、ということである。本研究では、発掘調査により、「広場」の形成過程を明らかにした上で、四辺を建造物で取り囲むことを指向する背景について、検出遺構や遺物の分析、類例の検討等を通じて明らかにし、都市の政治的階層を超越して古代マヤ社会を規定していた原理を追求する。

3. 研究の方法

本研究課題を遂行するにあたって、当初、ホンジュラス共和国コパン県所在のエル・アブラ遺跡等を対象として想定していたが、2011年、現地調査の開始が諸般の事情により遅れたため、対象遺跡を当初の計画から変更せざるを得ない状況になった。諸条件を検討した結果、本研究の対象遺跡を同県ラ・ヒグア市所在のエル・プエンテ遺跡と定めた。エル・プエンテ遺跡は、フロリダ谷に約5km毎に配置されるコパン政体の2次センターの一つであり、フロリダ谷、ラ・ベンタ谷、および両者を結ぶ自然回廊からなるラ・エントラダ地域で最大のピラミッド型神殿（建造物1）を擁する遺跡である。エル・プエンテ遺跡では、中心グループの西端に位置するプラサAを構成する建造物6を対象とする。建造物6は、プラサAを介して建造物1と対面しており、同遺跡の中でも最重要建造物の一つである。すでに報告者による2003～2004年の調査で、その上部構造については、保存状況が良好で、疑似アーチ式の屋根を持っていたことも明らかになっており、同遺跡の支配者の居住用建造物と想定している。発掘調査は、建造物の規模を考慮し、最終居住段階の様相を明らかにした上で、トレンチ調査による建造シークエンスの把握に努め、プラサA、すなわち、「広場」の形成過程とその果たした役割を2次センターのレベルで検討で

きる資料を収集する。

また、古典期古代マヤ社会の遺跡間階層性原理、つまり、中心と周縁の政治的経済的紐帯を探るための比較対象として、コパン遺跡 9L-22、23 グループの検討もおこなう。同グループは、コパン遺跡中心グループの北側に位置し、コパン・エリートの居住グループである。すでに中村誠一氏が主導するコパン考古学プロジェクトによって、調査・修復がおこなわれているが、本研究では、その出土資料をもとに、同居住グループの形成過程を示す証左となる自然科学的年代を明らかにする。

4. 研究成果

成果については、(1) コパン遺跡 9L-22、23 グループの年代測定結果、および、(2) エル・プエンテ遺跡の発掘調査を年度毎に記載する。

(1) コパン遺跡 9L-22、23 グループの年代測定結果

9L-22 からは、Rasgo#45 (試料 No. 53)、9L-23 からは、Rasgo#80 の試料 (No. 126、127、135、139)、Rasgo#184 の試料 (No. 382、386、414、503)、Rasgo#169 (試料 No. 302)、Rasgo#176 (試料 No. 320) の 11 点について、年代測定を株式会社パレオ・ラボに委託した。試料はいずれも炭化材である。その結果は以下に示すとおりである。

| 測定番号 | δ ¹³ C (‰) | 暦年校正 用年代 (yrBP±1σ) | ¹⁴ C 年代 (yrBP±1σ) | ¹⁴ C 年代を暦年年代に校正した年代範囲 | |
|----------------------------|-----------------------|--------------------------|---------------------------------|---|--|
| | | | | 1σ 暦年代範囲 | 2σ 暦年代範囲 |
| PLD-21818 試料 No. 53 | -25.39 ±0.11 | 1556±18 | 1555±20 | 437AD (51.6%) 489AD 512AD (3.4%) 516AD 530AD (13.2%) 543AD | 431AD (95.4%) 553AD |
| PLD-21819 試料 No. 126 | -27.51 ±0.11 | 1191±17 | 1190±15 | 783AD (6.4%) 790AD 810AD (61.8%) 878AD | 778AD (95.4%) 886AD |
| PLD-21820 試料 No. 127 | -21.37 ±0.12 | 1198±17 | 1200±15 | 780AD (10.2%) 792AD 805AD (58.0%) 870AD | 777AD (95.4%) 885AD |
| PLD-21821 試料 No. 135 | -24.07 ±0.11 | 1255±17 | 1255±15 | 694AD (57.7%) 748AD 765AD (10.5%) 775AD | 680AD (92.9%) 780AD 792AD (2.5%) 805AD |
| PLD-21822 試料 No. 139 | -26.55 ±0.11 | 1231±17 | 1230±15 | 716AD (23.9%) 744AD 768AD (14.7%) 783AD 788AD (21.3%) 815AD 843AD (8.2%) 859AD | 693AD (31.7%) 749AD 765AD (63.7%) 875AD |
| PLD-21823 試料 No. 382 | -22.82 ±0.16 | 1435±17 | 1435±15 | 612AD (68.2%) 642AD | 595AD (95.4%) 652AD |
| PLD-21824 試料 No. 386 | -23.47 ±0.11 | 1538±17 | 1540±15 | 442AD (29.9%) 494AD 533AD (38.3%) 564AD | 432AD (40.8%) 495AD 505AD (54.6%) 579AD |
| PLD-21825 試料 No. 414 | -24.86 ±0.10 | 1528±18 | 1530±20 | 469AD (6.2%) 479AD 535AD (62.0%) 575AD | 435AD (23.5%) 490AD 512AD (0.8%) 517AD 530AD (71.1%) 598AD |

| | | | | | |
|----------------------------|-----------------|---------|---------|--|--|
| PLD-21826 試料 No. 503 | -25.30 ±0.11 | 1739±18 | 1740±20 | 255AD (9.9%) 265AD 272AD (58.3%) 335AD | 242AD (92.2%) 354AD 367AD (3.2%) 380AD |
| PLD-21827 試料 No. 302 | -24.01 ±0.10 | 1561±18 | 1560±20 | 437AD (52.9%) 489AD 511AD (4.7%) 516AD 530AD (10.6%) 540AD | 430AD (95.4%) 545AD |
| PLD-21828 試料 No. 320 | -22.70 ±0.10 | 1525±18 | 1525±20 | 535AD (68.2%) 581AD | 436AD (18.8%) 490AD 530AD (76.6%) 600AD |

出土遺物の編年上の位置づけと併せて検討をおこなわなければならないが、今回の年代測定結果からは、最古の年代が 3 世紀中頃～4 世紀後半 (試料 No. 503)、もっとも新しい年代が 8 世紀後半～9 世紀後半 (試料 No. 126、および 127) を示していることがわかる。試料 No. 503 がコパン王朝の成立 (AD426 年) 年代よりも古い点を除外すれば、今回の年代測定結果は、コパン王朝の盛衰とシンクロしていると言えよう。コパン遺跡では、9 世紀初頭には、王権の崩壊が想定されているが、エル・プエンテ遺跡をはじめとした 2 次センターとの関係を測る上でも今回の年代測定結果は重要な意味をもつと思われる。つまり、南東マヤ地域の中心であるコパン遺跡の求心力が失われた結果、周縁もまた衰退するのか、あるいは、その逆の関係が成立するのであるか。すなわち、定説である再分配システムと王権イデオロギーの関係から語られる中心と周縁の政治的経済的紐帯の構造を検証する一助となるであろう。今後、出土遺物の分析、および、周縁地域の年代測定も継続する予定である。

また、今回、年代測定をおこなった試料は、樹種同定もおこなった。その結果は、以下に示す通りである。

| Sample No | Group No | Rasgo | 樹種 | 備考 |
|-----------|----------|-----------|-----------|-----------|
| 53 | 9L-22 | Rasgo#45 | マツ属複雑管束亜属 | |
| 126 | 9L-23 | Rasgo#80 | 樹皮 | |
| 127 | | | マツ属複雑管束亜属 | |
| 135 | | | マツ属複雑管束亜属 | |
| 139 | | | マツ属複雑管束亜属 | |
| 382 | | | マツ属複雑管束亜属 | |
| 386 | | Rasgo#184 | マツ属複雑管束亜属 | |
| 414 | | | 針葉樹 | 材が微小で同定不可 |
| 503 | | | マツ属複雑管束亜属 | |
| 302 | | Rasgo#169 | マツ属複雑管束亜属 | |
| 320 | | | 針葉樹 | 材が微小で同定不可 |

樹皮、および、同定不能な微小材 3 点を除き、残りの試料はすべてマツ属複雑管束亜属であった。コパン遺跡は標高 650m 程度に位置し、現在の植生においてもマツが生育しており、同遺跡周辺の植生は、当該期 (年代測定結果に基づけば、3 世紀中頃～9 世紀後半)

の面影を残しているとも言えよう。また、マツ属は樹脂を含み、可燃性がよいことから、燃料として用いられていたことをうかがわせる。

(2) エル・プエンテ遺跡の発掘調査

発掘調査をおこなった建造物 6 は同遺跡の西端に位置する (写真 1)。

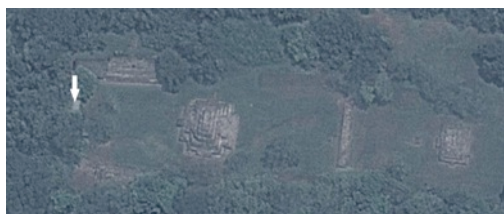


写真 1 エル・プエンテ遺跡中心グループの衛星写真(矢印が建造物 6)

【2012 年度】

2012 年度は、発掘調査、および、修復保存のための建造物 6 の残存状況を把握するため、正面北側の発掘調査、および、上部構造の修復作業をおこなった。

調査範囲は、写真 2 に示す通りである。

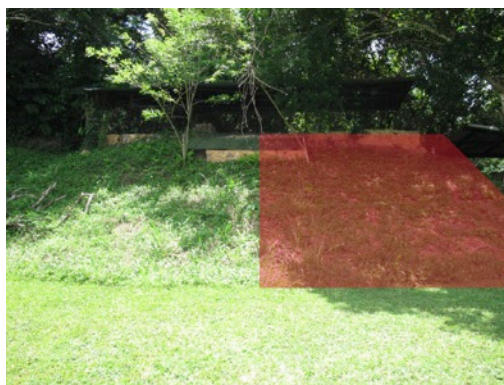


写真 2 建造物 6 東面の調査範囲

表土を掘削し、倒壊した壁体、壁内の充填材として用いられた未整形の石材を検出した。壁体の構成材を残し、精査をした上、基壇部の仮修復をおこなった。

その結果、二段の基壇の上に上部構造が構築されて折り、一段目の基壇は東面、すなわち「広場」＝プラサ A に面している部分は全面階段になっており、一段目の基壇上から二段目の基壇までは、上部構造へのアクセスのための



写真 3 建造物 6 仮修復状態

別の階段が設置されていることを確認した。ただし、この階段は残存状態が不良であることが確認された。また、少なくともこの中央階段側面の構成石材は、壁体の石材に比較し、小ぶりなものが選択され、整形についてもやや粗雑であることも確認した。

2012 年度は、仮修復ということで、倒壊した壁体の仮修復をおこない (写真 3)、遺構保護のため埋め戻した。

【2013 年度】

2013 年度は、2012 年の調査成果を受け、建造物 6 正面の完掘をおこない、建造物 6 の中心軸上にトレンチを設定し、建造シーケンスの解明を目標に設定した。2012 年の発掘調査では、一段目の基壇上に設置された中央階段の残存状態が不良であることが明らかとなったが、この中央階段の幅を確認し、継続して、一段目の基壇全面の階段、および、一段目、二段目の壁体修復をおこなう予定であった。

まず、2012 年度の調査で埋め戻したエリアを再掘し、建造物 6 正面 (東面) の南半分の表土を除去した上で、壁体の構成材、および、その他の崩落した石材を残し、修復が可能な石材の出土位置を確認、検討した。精査の結果、写真 4 に示すように仮修復をおこなうことで、建造物 6 の正面の様相は明らかになったが、その過程で以下の四点については、特に留意すべきであろう。



写真 4 建造物 6 正面 (東面) の仮修復

① 中央階段の残存状態について

2012 年度の調査でも中央階段の残存状況が不良であることは指摘されたが、2013 年度の発掘によって、その状況が再



写真 5 建造物 6 正面階段 (東から)

認められた。ただし、南端を規定する石列が残っていることから、この中央階段の幅が南北 5.8m におよぶことは確定できた（写真 5・6）。確認できる階段は二段のみであるが、アンデンの幅と現存する階段のピッチから、正面階段は五段で構成されたと推定できる



写真6 建造物6正面階段南端（南から）

② 石材の抜き取り痕

上記①とも関連するが、建造物6正面南側については、崩落した石材も含め、整形された石材が表土掘削時から少ないことが確認されていた（写真7）。全体の様相から、石材が抜き取られたものと判断される。エル・プエンテ遺跡をはじめ、周辺地域では、整形された石材の転用目的で抜き取られることがしばしばおこなわれており、今回も同様である。ただし、建造物6発掘前の表面観察では、その抜き取りの痕跡が一切確認できなかった。



写真7 石材抜き取り痕

③ プラサA 漆喰床面、一段目の基壇前面階段の漆喰、漆喰ブロック

2012年度に調査をおこなった建造物6北東面では確認できなかったが、2013年度の調査では、プラサAの漆喰床面を検出した（写真8）。また、一段目の基壇前面階段も一部、漆喰で覆われていた痕跡を示している。更に、南東面の調査からは屋根部材と思われる崩落した漆喰ブロックを複数確認、回収した（写真12）。

④ 建造物7との接合状況

当初、建造物6の南東隅を確認できな



写真8 建造物6正面漆喰床面（プラサA：南東から）



写真9 建造物6出土の屋根部材と考えられる銅青委ブロック

かったため、発掘区を3×3mの範囲で拡張した（写真10）。その結果、建造物6は少なくとも最終居住段階においては、南側に隣接する建造物7と結合していることがわかった。また、この拡張区を精査したところ、石製の樋の部材が確認され、建造物7もまた疑似アーチ式の屋根構造をもつことが推測された。現状では建造シーケンスのどの段階で二つの建造物が連結するのかわからないが、これら二つの建造物の往時の姿を推定復元すると、プラサAを構成する建造物3（北辺）、同4、5（北西隅）、および同10（南辺）とは屋根構造を含め、異質であることがわかる。



写真10 拡張区（建造物6-7接合部分（東から））

【考察と将来構想】

上述のエル・プエンテ遺跡建造物6の調査結果から、以下のような現況における予察と問題提起が可能であろう。

最終居住段階における建造物 6 の構造が明らかになったが、エル・プエンテ遺跡のようなコパン政体の二次センターにおけるローカル・エリートの居住用建造物は、その規模や建築様式の点からコパン・エリートのそれとは差異は見られない。たとえば、コパン遺跡の中心グループ北に位置するラス・セプルトゥラス地区は、コパン・エリートの居住区画であるが、その中のセレスティアル・グループとの類似、あるいは、上記の屋根の部材である漆喰ブロックについては、ラストロホン遺跡でも類例が確認されている。このことから、二次センターの支配者層がコパン・エリートと政治的階層において同列であるかどうかを論じることは避けなければならないが、碑文記録や石彫等がエル・プエンテ遺跡例では欠落することに留意しなければならない。多数の石彫が採集されているエル・アブラ遺跡や建造物を飾る石彫が確認されたラス・ピラス遺跡、マヤ文字が刻まれた石碑をもつロス・イゴス遺跡など、ラ・エントラダ地域に分布する二次センターにおいても類例はあるが、これらの要素の有無ばかりでなく、「密度」やその質的差異が中心と周縁の政治的階層性を構成していると考えられる。一方で、建造物 6 の調査成果やエル・プエンテ遺跡建造物 1 出土の人物像型香炉の研究(寺崎 2014)を通じて、「広場」を構成する文化的景観やそこで展開される儀礼などの非言語的パフォーマンスの類似、あるいは相同性に着目し、中心の王権イデオロギーが周縁に敷衍し、両者が結合することを検証することが可能になるであろう。

従来、古代マヤ社会は長距離交換モデルによる国家形成という枠組みの中で語られ、偏在する資源の再分配が都市間、域内のネットワーク強度の指標とされてきた観があるが、上述のような別の説明原理の是非についても議論する時期に来ていると思われる。

そのためには、本研究期間内では実現できなかったエル・プエンテ遺跡の支配者、すなわち、ローカル・エリートの埋葬状況を将来的には確認することによって、上述の非言語的パフォーマンスの実像を示し、コパン・エリートとの間の特異性・普遍性を示す必要がある。

また、2013 年度の調査では、建造物 6 の仮修復が終わったことから、埋め戻さず、一般に公開できる状態にしてあるが、これは、文化資源の活用という点で重要である。とりわけ、開発途上国における文化資源の開発は経済効果の面で期待されるものであると同時に「乱開発」の危険も内包している。本研究対象遺跡を含む古代マヤ文明圏の考古学研究と開発問題は切り離すことはできず、「応用考古学」の確立も必要である。たとえば、エル・プエンテ遺跡建造物 6 の場合、国立遺跡公園として機能していることから、発掘成果を現地で公開することの学術的、教育的、経済的な効果が期待できると同時に良好な

状態で保存されていた漆喰を高温多湿下の環境に暴露することによって生じる劣化の問題も考慮しなければならない。漆喰の保存技術の確立や技術者の要請もまた急務であろう。

最後に本研究の遂行にあたっては、ホンジュラス国立人類学歴史学研究所の全面的な協力を得、また、中村誠一氏(金沢大学国際文化資源学研究センター教授)からは貴重な助言、サポートを受けました。ここに記して感謝いたします。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文] (計 1 件)

寺崎秀一郎、「南東マヤ地域出土の人物像型香炉について-コパンとエル・プエンテ遺跡出土例の比較-」、『早稲田大学大学院文学研究科紀要』、第 59 輯第 4 分冊、31~49 ページ

[学会発表] (計 1 件)

寺崎秀一郎、「中米ホンジュラスにおける日本の文化遺産協力活動-世界遺産コパンをはじめとして-」、『2013 年第 8 回文化遺産国際協力コンソーシアムシンポジウム：世界遺産の未来-文化遺産の保護と日本の国際協力』、主催：文化遺産国際協力コンソーシアム・文化庁、2013 年 10 月 26 日

[その他]

発掘調査報告書

Terasaki, Shuichiro(2012) *Informe Temporal(2012) de las Investigaciones de la Estructura 6 en el sitio El Puete, Copán*. En el Archivo del Instituto Hondureño de Antropología e Historia, Tegucigalpa, Honduras.

Terasaki, Shuichiro(2013) *Informe Temporal(2013) de las Investigaciones de la Estructura 6 en el sitio El Puete, Copán*. En el Archivo del Instituto Hondureño de Antropología e Historia, Tegucigalpa, Honduras.

6. 研究組織

(1) 研究代表者

寺崎 秀一郎 (TERASAKI, Shuichiro)

早稲田大学・文学学術院・教授

研究者番号：90287946